

オーラルヒストリーによる外国語学習法に関する質的研究：
アジア地域で活躍するグローバル人材のインタビューからの考察¹⁾

那須 雅子

はじめに

現在、グローバル化や情報化の進展に加え、AI時代の到来、超高齢化などの社会構造の急激な変化への対応力が求められている。多様化するグローバル社会において活躍できる人材育成を目指す上では、英語を中心とする外国語学習を軸としつつ、多面的および複合的な視点から、真に必要とされる学習内容について検討することが重要課題となっている。

本稿は、オーラルヒストリー—すなわちインタビューによる口述記録手法—を援用して、日本人にとって有効な外国語学習法の特定を試みる研究に関するノートである。高度なレベルにまで外国語の習得に成功した日本人への口述インタビューを行い、それらの蓄積データを質的に分析することにより、高い外国語運用能力を習得するまでの道のりを明らかにしていく。さらには、今回はこれまでインタビュー実施を行った対象者の中から、アジア地域で実際に活躍するグローバル人材を抽出して、高い語学力の習得からその運用までの成功体験を詳細に考察し、単なるスキルとしての外国語運用能力の習得プロセスに留まらず、それらを高度に運用するために必要不可欠な要素の特定を試みる。

研究の背景

平成 26 年度（2014 年度）に文部科学省の「スーパーグローバル大学創生支援事業（Top Global University Project）」により、10 年間にわたる大規模な取り組みが日本各地の大学でスタートした。²⁾ これは、日本における高等教育の国際競争力の向上とグローバル人材の育成を図るため、国際化を徹底して進める大学を支援するものである。平成 31 年度（2019 年度）予算額（案）でも、大学教育におけるグローバル展開力の強化のために、4,705 百万円が組み込まれている。³⁾

グローバル人材に求められる様々な要素のうち「語学力・コミュニケーション能力」は当然重点化される項目であり、小学校から大学レベルに至るまで英語教育強化のために様々な取り組みが行われてきている。ここで、スーパーグローバル大学創生支援事業がスタートする数年前に文部科学省から出されたグローバル人材育成推進会議中間まとめ（2011）による報告に注目したい。グローバル人材に求めるべき語学力水準についての報告は、「業務上の文書・会話レベル」の中級レベルの裾野の拡大は着実に進捗しているものの、「二者間および多数者間折衝・交渉レベル」といった上級レベルの人材が「人材層」として確保されることが極めて重要とされている。すなわち、現在日本社会に求められているのは、会話レベルではなく、交渉レベルという、日本の大学生の現状水準から見ればかなり高度なレベルの語学力を持つ人材である。

それでは、高度なレベルとはどれくらいの英語力を示すものか。例えば、TOEIC で満点近

くの高得点が取れたとしても、グローバル人材として国際社会で実際に通用するとは必ずしも言えない。あるグローバル企業人事部のコメントによれば、「2000年前後から、TOEICレベルのスコアが高い人材や帰国子女を採用した結果、受験英語や発音のきれいな英語を使える人は増えたのに、ビジネスで通用しない社員が増えた」（2016年12月『商社の英語』週刊ダイヤモンド）とのことである。21世紀に入り、単なるTOEICの高スコアではなく「多数者間折衝や交渉レベル」という高度な外国語を駆使するような人材育成を目指すことが求められるようになってきた。この20年間でグローバル社会に生きる日本人に求められる英語力レベルは極めて高くなり、その運用場面やコミュニケーションの質もまたさらに高度な内容へと大きく変容しているのである。

このような時代背景を反映する状況として、近年、大学入試では「読む・聴く」のみならず「書く・話す」能力が評価項目に加わる施策が実行されつつある。受信型スキルのみではなく、発信型スキルの向上が迫られているのである。しかしながら、発信型スキルの運用に必要となるのは言語的側面だけではない。まず発信内容そのものがあるか、そして論理性があり、適切な内容となっているかどうか、など言語化する以前にその発信を左右する内容そのものと切り離しては考えられない。真に必要とされる高度な発信力とは、豊富な知識や論理性、説得力、表現力などに支えられたものでなければならない。オーラルヒストリーによって外国語習得の成功者、とりわけ高度なグローバル人材として活躍する先達の学習履歴を集積し、言語的スキル及びそれを高度に運用するための要素を合わせて考慮し分析考察を行うことにより、これらの課題に対しても有益な示唆を与えることが重要であろう。

オーラルヒストリー研究と外国語学習

さて歴史研究分野の用語である「オーラルヒストリー」は、「口述史」・「聴き書き」により、個人の証言に焦点を当て、個人史から歴史の全体史を再構築しようとする比較的新しい研究手法である。この手法を語学教育に応用することによって、外国語学習を実践している個人の学習履歴を蓄積し、個人の成功体験から外国語学習全体に共通する汎用的要素を明らかにすることを意図している。⁴⁾

オーラルヒストリー研究の利点としては、主に2点が挙げられる。まず、外国語学習の成功者の声を扱うことができる点である。大量データの分析では、個別の成功事例は全体の中で平均化されてしまう。個人の学習の実情は、数値によって示すことは困難であるし、またアンケートやデータなどの量的研究では、本来あるべき姿や参考にするべき貴重な成功例が埋もれてしまう。一方、オーラルヒストリー研究では、秀でた外国語運用力を身に付けた成功者の実体験に集中して調査することが可能になり、現実的かつ有益な学習法の手がかりを得ることができるのである。ある世界を熟知しているインフォーマントを数名取り上げるような研究は、知識のない1千名を統計調査するよりはるかに代表性があるという Plummer (2001) の主張は語学の達人研究にも当てはまる。

2点目として、長期的視点から分析考察することが可能になる。オーラルヒストリーでは、幼少期からの長期間にわたる学習者の軌跡を辿ることができる。例えば、通常の日本人の英語学習の実態を把握しその効果を測るには、大学入学以前の英語学習の積み上げや、卒業後

の取り組みを総じて考慮する必要がある。また、教員が指導する授業時間以外の学習状況を考慮することも重要である。しかしながら、個々の教員が学生を担当する期間は、半年または1年間という短期間にすぎない場合が多い。一定期間の授業アンケートや授業期間前後の到達度測定などの客観的データに基づいて英語教育を論じるのは限界があり、その場しのぎに陥りがちで、説得力に欠ける。一方、オーラルヒストリーによる質的研究では、個々の学習履歴をインタビューによって丁寧に扱うことから、英語学習開始時からインタビュー実施時までの長期間にわたる学習履歴をトータルで考察することが可能になる。したがって、学校教育課程での学習に加えて、卒業後の学習状況や体験を包括的に研究対象として捉え分析考察することにより、中学校、高等学校、大学などの教育機関における限られた授業時間内で扱うべき優先課題を特定することにも期待が持てると思われる。

これまでのインタビュー実施と成果

これまでオーラルヒストリー研究に基づいて実施したインタビューの対象者は、42名である。内訳は日本人が37人とその他が5人である。日本人のうち、社会人が14人、高専生、大学生および大学院生が18人、中学・高校生が5人である。これらの対象者の分析から、日本人が標準的な学校教育からスタートして、実際に高度なレベルの英語力を習得するための道筋とは実際どのようなものであるかを考察した。通常、日本人は小学校から大学までの期間を経て就職し、社会に出た後も語学学習は継続される。この長期間の道筋は画一化された道筋ではないにしても、いくつか一定の参考にすべきパターンや類似する傾向を見出すことが可能であった。これまでの成果として、(1) インタビュー対象者の家庭環境や生活環境によって、効果のあった勉強法の報告には多様性が認められた。一方で(2) 中級レベルに到達した段階では「多読」と「多聴」が有効であることが明らかになった。(那須, 2015) さらに(3) 上級・達人レベルの対象者に共通する学習体験として、文学作品など高度な言語レベルの原書を読んでいることが解明された。(Nasu, 2015) これらは、日本人に特有の生活環境や教育システムを共有する先達の成功例として参考にできる成果であると考えられる。

アジア地域で活躍するグローバル人材のインタビュー分析と考察

次に、インタビュー対象者の中で、上記の文部科学省の報告で指摘されている「複数者間折衝・交渉レベル」といった上級レベルに達していると考えられる日本人について注目したい。今回、海外において高い語学力を駆使して活躍している現役のグローバル人材K氏のインタビューを抽出した。K氏は、大学院修了後に、香港、台湾、タイなどアジア地域に複数の拠点を持ち、広くビジネス展開をしている企業で活躍している。これまで実施したインタビュー対象者の中で、最も詳細で豊富なインタビュー内容を含んでいる人物である。K氏には2回のインタビューを行い、その合計時間は、8時間以上に及んだ。インタビュー実施後には面談を1度行い、またメールなどで内容の裏付けや追加質問をするなどのフォローアップも行った。

1回目のインタビュー(2012年2月28日実施)を基に、K氏の外国語学習に関連する履歴や体験事項を一覧にまとめたものが、資料1である。K氏は中学校と高校の6年間と大学

で4年間英語を学び、国内で1年間の留学準備期間を経て、シドニーで1年間学部留学した後、シドニーの大学院を2年間で修了した。K氏は、日本国内でも多くの外国人と触れ合う機会を持つ一方で、中学校の期間に学んだ基礎力を土台として、中学校卒業時に英語検定試験の1級に合格、留学前の大学時にTOEFL (PBT) で600点という高い英語力を習得している。大学卒業後、オーストラリアの大学院では、高度な言語レベルの原書を様々な分野にわたって集中的に読んでいる。就職してからは、英語に加えて、東京のアルバイト先やオーストラリアの寮生活で身に付けた中国語も駆使してビジネス界で活躍している。

K氏との2回目のインタビュー(2015年2月18日実施)では、主にアジア地域でのビジネス展開に関する体験を中心に話してもらった。国際場裏で積極的に外国語を運用しながら、他国の人々と対峙する様子を詳細に聴き取った。国際社会で活かせる語学力とは、表層的スキルではなく人の心を動かせるコミュニケーション能力でなければならない。そして、その語学力を支える教養的要素の重要性が浮き彫りになった。K氏によれば、海外において国際的視野に立って交渉を行うための教養的要素の一つは、相手の国の文化背景や歴史背景に関する豊富な知識とそれらを組み合わせる思考力であると言う。相手とコミュニケーションを行い、心が通じ合うには、まず互いの共通項を見出すことから始まる。相手をよく知ることが歩み寄るスタート地点である。相手に応じた話題を提供して柔軟に対応するために、豊富な知識とそれらを状況に応じて引き出す思考力が必要になるということである。

最後に、K氏自身が幅広い知識を得るきっかけとなったと考えられる「読書」について、2回のインタビューの後(2019年2月19日)に、K氏に質問をした。その際の言葉を引用したい。

今、活字を読んで想像力を高めるのが苦手な人が増えている様な気がしています。映像や漫画などへの依存比率が高くなってきて、映像も漫画ももちろん良いのですが、慣れすぎると、自分の頭と体験をリンクさせながら物語や話を想像する力が乏しくなっている様な感じがしますね。僕の場合は、地図や図鑑、百科事典の類を常に持ち歩く様な性質でした。行ったことない国でもそれらを見ながら、知らないなりに色々想像したりしたものです。お金がなくても、日常から離れた体験ができる。僕の場合、地図や百科事典の場所に思いを馳せ、その後、読書で知った情報を頭の中で立体的にして、それを海外で実際に確認したり、体験したりしていくような人生だった気がします。今はインターネットが時間もお金もかからず、より多くの情報をもっと短時間で「与えて」くれるので、このやり方だと便利ですが、ちょっと受け身になりがちですね。外国のことなら沢木耕太郎とか、中華系のことならマフィアを題材にした馳星周だとか、政治家や経済人の伝記も読みました。読んだ本とか地図とかの情報をパズルのように組み合わせて、色々想像してみましたよ。

読書は、知識を得るのみならず想像力をたくましくするものである。そして、読書体験は、頭の中での仮想体験にも繋がる。これは、パソコンのゲームの仮想体験とは異なり受け身ではなく、読みながら言葉の力をフルに活用し目に見えない世界を構築する能動的な体験とな

る。K氏が好んで読んだ沢木耕太郎の外国を旅するエッセイは、K氏が仕事でアジアを駆け巡る姿と重なる。異なる文化圏の人々に次から次へと混ざり合い、深い人間関係を構築する柔軟性や人間力は、K氏が読書体験で培った想像力と仮想体験に結びついているものだろうと思われる。

さらに、具体的にはどのような「読書」が印象に残っているかという質問に対して、K氏から以下のような言葉が返ってきた。

僕が人生で一番衝撃というか、今でも一番大切にしているのは、シンガポール初代総理、リー・クアンユーの自伝や、彼が各種出版した本です。あとは台湾元総統の李登輝の自伝及び各種出版物、これもかなり読んでいます。小学3年生くらいからインターネットが普及するまでは読むことをずっと続けていました。李登輝、リー・クアンユーの人生に出会ったのは、記憶の上では1988年、1989年頃でした。それを貪る様に読んだ記憶があり、その後に繋がるキッカケになりました。本から得られる衝撃というのは、一生を左右するくらいの力があると思います。

幼少期から長期間にわたって、アジアの偉大な人物の伝記や彼らによる書籍を読んでいるK氏は、自らの活躍の場をアジアの中に見出して、分野こそ異なっているが、その行動の原動力や語学習得への高い意識などを得てきたようである。⁵⁾そしてそれらの「読書」を通じて、自分の人生に大きな影響を受ける体験をしている。すなわち、「読書」から生きる力を得て、グローバル人材として幅広く活躍するようになったと言えるのではないだろうか。

グローバル人材育成と教養教育について

今回の研究ノートの最後に、グローバル人材教育を目指すために、高度な語学教育とともに重要視すべき教養教育について触れておきたい。K氏の体験を基に、スキルとしての語学力に加えて、グローバル人材として教養を高めるための「読書」の重要性を指摘してきたが、近年では、一見すると古いと感じられる「読書」への回帰の動きが少なからず見られるようである。実際、「教養」をキーワードとする本が次々と出版されており、その著者の多くが主張しているのが「読書」の重要性である。例えば、『国家と教養』（2018）の著者である藤原正彦氏もその一人である。彼は日本人として日本の近代文学を読むことを推奨している。⁶⁾

もう1つ取り上げたいのは「読書」を大学教育の中心に据えて、世界中で注目されているSt. John's College（アメリカ）の先進的な教養教育カリキュラムである。⁷⁾ St. John's Collegeの学長であるパノ・カネロス氏は、最先端の科学技術が発達する今の時代に最も必要な教育とは教養教育であると述べている。

Though we are repeatedly told that we need to produce more specialists in STEM (Science, Technology, Engineering and Math), the best education suited to our age is a well-rounded, liberal education in natural science and the humanities. Looking backward to Ancient Greece, we introduce and

explain the history of liberal arts education. The model of that form of education, adapted to the demands of the modern world, can be found at St. John's College, which requires a general education in the tradition of Western great books. That education cultivates the habits of virtue, of discussion, of translation, writing, experimentation, mathematical demonstration, and musical analysis to train students to become highly adaptable, creative thinkers around complex problems.

(Kanelos and Rotner, 2019:108)

この大学では、現代の複雑な問題に柔軟に対処し、想像力を発揮できる人材育成のために、西洋の古典を「読む」ことを通じて教養を積むことを目指している。教養教育カリキュラムの主軸となるのは、20人以下の少人数クラスにおいて古典の原書を読み進める読書プログラムである。このプログラムでは、学部1年生から4年生まで、読書リストが作成されている。プログラムの読書リストに挙がっている分野は多岐にわたり、哲学、文学、心理学、歴史、宗教、経済学、数学、化学、物理学、生物学、天文学、音楽、言語などあらゆる古典が含まれている。英文学研究者にとって身近なところでは、プラトン、シェイクスピア、オースティン、ニーチェなどが名を連ね、最後には20世紀英文学のヴァージニア・ウルフの *Mrs Dalloway* や *To the Lighthouse* も挙げられている。担当教員は、文系、理系を問わず、文学者、経済学者、化学者、物理学者など様々な専門分野を持つ教授陣である。しかし教授陣の専門分野とは関係なく、授業で扱う古典のタイトルが担当教員に割り振られる。教員は、セミナー形式で古典を読み解く学生たちのファシリテーター（調整役）として位置づけられており、解釈の試みを支援し、議論を促す役割を担っているようである。

このように日本でも海外でも、「読書」を見直す動きが見られる。これは、多くの難題を抱える新時代を乗り切る手立てを、読書を通じて得ようとする動きの現れのようなのである。答えのない複雑で困難な問題が山積している現代社会を生き抜くための「知恵」は、人類が受け継ぎ、蓄積してきた思想や哲学、文学や宗教といった古典の書物にあると考えているからではないだろうか。ますます細分化され専門化されていく学問分野の一方で、バランスの取れた豊かな視野を涵養する教養教育を充実させていくことが課題となっている。古代から受け継がれてきた古典を読むという学問のあり方を見直す必要性が教養教育において生じているように思われる。現在、日本の大学の教養教育の中で大きな割合を占めているのが、外国語科目であり、その多くが英語科目である。外国語教育と教養教育とは、その扱う領域において一緒に議論することはもちろん簡単ではないが、ある一定の部分において同じ目標を共有し、新時代に対応できる教育プログラムを構築していくことが可能ではないだろうか。

今後の研究に向けて

本稿では、まず高度な外国語運用力を習得することに成功した対象者のインタビューの分析考察を振り返った。そしてそのインタビューの中から、高度な語学力を駆使し、外国人との折衝や交渉を行いながら実際にアジア地域で活躍しているビジネスマンのインタビュー内

容に注目した。そこから、語学スキルを高めるとともに、グローバル人材育成の教育において、豊かな知識を得る手段のみならず、想像力や人間力を高めるものとして「読書」の重要性を見直すべきであるという示唆を得た。現段階においてはまだ整理しきれていないが、グローバル人材育成と教養教育の目指すべき共通の方向性を、語学教育の中に模索することの可能性も示唆した。今後、引き続き、アジア地域で活躍するグローバル人材を対象として新たなインタビューを行う予定である。高度なレベルの語学力習得を基盤として、豊かな教養に支えられた人材育成の実現を目標として研究の継続を行いたい。

資料1：K氏の外国語習得に関する履歴（2012. 2. 28 インタビュー実施）

<年齢>	<所属>	<外国語習得に関する詳細項目>
	幼稚園	東京の外国人が多い地域に住む。近所の駐在員の家族と交流。サムエル幼稚園に通う。日本人主体だが、外国人の園児が多い。日頃から英語を耳にする。
7歳	小学校	学区外の普通の日本の学校に通う。母親の勧めで赴任が終わって帰国する駐在員について行き、小5からホームステイ。2週間で英語に順応。中2まで休みのたびに毎年アメリカに行く。聴く・話す、の基礎ができる。書く技能の基礎は、母親からだけでなく、オレゴン州で現地の子と一緒に小学校の授業を受け、サマースクールにも通い、教わる。
13歳	中学校	入試のない普通の公立だが、外国人に接する機会の多い地域にあり、地区の中でもテストの英語レベルが高い中学に通う。3年間、同時通訳の経験がある厳しい先生に英語を教わる。毎回、教科書を暗唱して、小テストで暗写。リズムで覚えるために筆記体で書く。文法は、言う、書く、見る、をセットで覚える。授業時に前の学年の教科書も携帯し、暗唱。語彙を多く習得。楽しんで学習。特に塾には通わない。卒業の頃に英検1級取得。
16歳	高校	都立の自由な学校を受験し、入学。中2でホームステイが終わり、中学校の厳しい授業もなくなる。簡単な授業に退屈する。英語力は維持しないといけないものだと気づく。British Council に1日3時間、週3回、2年間通い、厳しい訓練を受ける。イギリス人の先生から教わる。基礎に戻ったコースから始め、追加で文法を教わる。その後、マンツーマンで、理論的に系統立ててエッセイを書く訓練を続ける。ビジネスや考古学、環境問題をテーマに書く。追加でIELTS®の練習をし、イギリスの大学に留学できる訓練を受ける。

- 19 歳 大学 海外の大学に行くことについて父親の反対もあり、N大学商学部に入學。ゼミを選択する代わりに、英語コースを取る。1、2 年は必修科目の外国語として英語を選択。3、4 年は週に 2、3 回、専門の内容の英語をアメリカ人と日本人の先生から学ぶ。英語の資料を読み、英語でディスカッションをし、1 回に英語で 1,000 語程度のレポートを書く。アメリカ留学後に日本に来たアジアの留学生が多く、香港人や台湾人と親しくする。英語でコミュニケーションを取る。英語で考えるため、第二外国語としてのフランス語は習得できなかった。4 年間で卒業し、オーストラリアに留学するために 1 年間アルバイトをする。六本木のアメリカ人が多く来るレストランで、在学中から合わせて 5 年間働く。自己流で勉強して TOEFL550 点取得。塾に通って 600 点に伸びる。シドニーの大学に入學 (24 歳)。1 年間通う。大学の寮で生活。本格的に中国語と出会う。周囲にアジア人が多く、食堂や居間で毎日中国語を聴く。香港のケーブルテレビを見る。英文法を中国語に転用したり、自己流に漢字の音読みの法則と組み合わせる。音を聴いて漢字を紙に書いてもらい、声調を区別する。半年後、中国語が少し話せるようになる。1 年後にコミュニケーションが取れるようになる。
- 25 歳 大学院 シドニーの大学院に進學。現地の人と同じレベルで金融等を学ぶ。1 日 30 冊の本の内容を読み取る技術を身に付ける。毎週リサーチしたテーマについて論文を書く。テストや論文は割と良い。社会経験に基づいたケースについてのプレゼンテーションが苦痛。2 年かけて修士課程を修了。
- 27 歳 就職 台湾の製造業の会社に就職。本社からすぐにタイに赴任。バンコクの工場で、タイ語を勉強しなければならない環境に置かれる。中国語の法則を用いてタイ語を勉強。文字は読めないが、音を聴いて半年後にコミュニケーションが取れるようになる。中国語の基礎を利用しながら発音を変えて、広東語も少し話せるようになる。中国の下請け工場に転籍 (30 歳前後)。1 年間、毎月の半分、中国語しか話せない環境で、中国人と渡り合う。
- 35 歳 インタビュー実施時 厚生労働省の人材育成プログラム作りを経て、NEC 等の企業コンサルティング顧問。中国政府の随員。台湾や海外の電子部品の輸入代理業務も手がける。

注

- 1) 本研究は、研究題目「外国語学習版オーラルヒストリー研究：アジア地域で活躍するグローバル人材を中心に(18K00831)」の助成を受けている。
- 2) 例えば、岡山大学はタイプB（グローバル化牽引型）に選ばれ、4学期制の導入や英語カリキュラムの刷新など、様々な取り組みを継続している。
- 3) 『2019年度予算（案）のポイント』文部科学省
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/12/21/1412042_01.pdf (2019年2月27日アクセス)
- 4) オーラルヒストリー手法を援用した外国語習得の先行研究には、斎藤（2000）、白井（2004）、鳥飼（2007）などがある。
- 5) K氏が語った2人の共通点について一部引用する。「リーと李の二人とも語学が非常に堪能で有名だが、第一言語と母語が一致しない。リーの母語はマレー語と福建語の混合した、当時のシンガポール・インドネシア・マレーシアの中華系の共通語だが、第一言語は英語。李の母語は台湾語(福建語)だが、第一言語は日本語。リーの情報収集は主に英語から始め、必要に応じ中国語(北京語)、福建語、マレー語に変換する。李の情報収集は日本語から先ず行い、それを中国語(北京語)や台湾語に変換する。2人とも基本的には自分で原稿を書く。この2人が国を経済発展させた実績は世界でも有名だが、2人とも第一言語と母語も異なっていて、共に情報収集の意欲が凄まじいうえに、好奇心が強く、85歳を過ぎても常に勉強することを厭わない姿勢だったこと。」
- 6) 藤原氏は、従来のエリート層がおこなった西洋書物中心の読書は教養主義的で限界があるとし、「ユーモア」や「情緒」など人間的な感覚を育む「読書」を推奨している。その素材としては、実世界に触れ道徳や情緒を学べる日本の近代文学や大衆芸能を挙げている。
- 7) St. John's College (Annapolis, MD, USA) の教養教育カリキュラムにおける読書リスト <https://www.sjc.edu/academic-programs/undergraduate/great-books-reading-list> (2019年2月27日アクセス)
- 8) IELTS (アイエルツ : International English Language Testing System) は、年間300万人の受験者数を持つ英語運用能力評価試験である。

引用文献

- 斎藤兆史（2000）『英語達人列伝』 東京：中公新書。
竹内理（2007）『「達人」の英語学習法』 東京：草思社。
竹内理（2010[2003]）『より良い外国語学手法を求めて外国語成功者の研究』 東京：松柏社。
鳥飼久美子（2007）『通訳者と戦後日米外交』 東京：みすず書房。
トンプソン・ポール著・酒井順子訳（2002）『記憶から歴史へ：オーラル・ヒストリーの世界』 東京：青木書店。
那須雅子（2015）「達人」の外国語学習履歴に関する質的研究：外国語学習のオーラルヒストリー分析、*JAILA Journal Volume 1*. 73-82.

藤原正彦 (2018) 『国家と教養』 東京：新潮新書.

Kanelos P. and L. Rotner. (2019) An Ancient Approach to Education for the Post-Modern World, *JAILA Journal Volume. 5*. 108-115.

Nasu, M. (2015) The Role of Literature in Foreign Language Learning, Ed, Teranishi, M. et.al. *Literature and Language Learning in the EFL Classroom*. Palgrave Macmillan: Basingstoke.

Plummer, M. (2001) *Documents of Life 2: An Invitation to a Critical Humanism*. London, Thousand Oaks, New Delhi: Sage.